

令和7年度 現地説明会 令和8年3月7日（土） 10時～11時30分

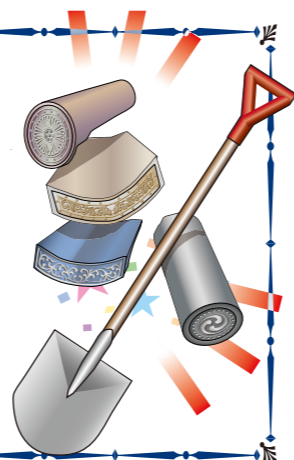
淀城跡・桂川関連遺跡近隣住民対象現地説明会資料

調査地：伏見区淀木津町地先

調査期間：令和7年4月1日～ 令和8年3月31日（予定）

調査機関：京都市 文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課

調査面積：約5,920㎡



1. はじめに

京都市文化財保護課は、国土交通省淀川河川事務所が進めている河道掘削工事に伴って、発掘調査を実施しています。調査は複数年にわたって計画しており、今年度は伏見区淀木津町の河川敷にて調査を行っています（図1）。調査地は、「淀城跡」と「桂川関連遺跡」に該当しています。「淀城跡」は、元和9年（1623）に伏見城廃城に伴って京都の守護として築城された城とその城下町を含む遺跡です。明治4年（1871）に淀城は廃城となりましたが、現在の與杼神社及び淀城跡公園に本丸の石垣や堀などが残されています。一方「桂川関連遺跡」は、近年の治水工事に伴う発掘調査成果を受けて新たに登録された遺跡です。長らく不明であった桂川治水工事の実態や河川周辺の人々の営みを知ることができる遺跡として注目を集めています。

さて、江戸時代の淀城下町を描いた絵図（『山州淀御城府内之図』・『淀惣絵図』）を見ると調査地周辺には、武家屋敷や長屋が建ち並ぶ「外高嶋」、外堀や中堀につながる「五間堀」、その南側の「埋立地1」（絵図に名称記載がなかったため、本調査では「埋立地1」と呼ぶことにします。）、「桂川」、「旧木津川」（1637年～1870年）があったことが分かります（図1）。この内、「外高嶋」・「埋立地1」は、寛永14年（1637）に木津川を付け替えることによって新たに造成された城下町です。「五間堀」もこの時に開削されたと考えられます（表1）。

今回の調査では、これらに関連する遺構の発見が期待されました。

2. 発見した遺構

発掘調査では期待した通り、「五間堀」、「外高嶋」、「旧木津川」、「埋立地1」に関連する遺構を確認することができました。

五間堀 17区中央で確認した東西方向の堀跡です。絵図によれば「五間堀」と呼ばれていたことが分かります。堀の幅は約10～21m、深さが約2.5～3.0mで、調査区中央西側辺りで僅かに南に向きを変えています（写真1）。法面勾配は緩やかで、頁岩やチャートが張り付けられています。南法面の傾斜が変化する場所には、法面の崩落を防ぐために竹杭や木杭を打設しています（写真3）。護岸は3回程度改修されています（写真4）。概ね古い時期の護岸に大きな石材が使用されています。

調査区西側の堀底には多量の石が敷き詰められています（写真2）。法面を見る限り石が崩落した痕跡は認められなかったため、意図的に多量の石を用いてかさ上げしたと判断しました。これは、増水時に本流にあたる桂川からの逆流を防ぐことを目的にしていたと推測できます。現在も本流と支流が合流する地点には類似した工法（床固工）が用いられることがあります。

外高嶋 17区の北側（五間堀の北側）で確認した埋立地です。絵図によれば「外高嶋」と呼ばれていたことが分かります。平坦面には五間堀に沿うように小石が敷き詰められています。敷き詰められた小石は路面のように平らな面をなしていることから、外高嶋に敷設された道路の可能性を考えています。また、道路の北側には平らな面を上に向けたやや大きな石が東西に並ぶように据えられています。これは柱を支えた礎石だと考えられます。調査区では一列に並ぶ3石の確認に留まることから、塀のような遮蔽物があったと考えています。

埋立地1 17区南側（五間堀の南側）で確認した埋立地です。外高嶋のような道路は認められませんでした。ただ、造成土の中に多量のこぶし大の角礫が混在しており、埋め立てにあたって補強材として利用した可能性があります。

3. まとめ

今回の調査で、初めて淀城の「外高嶋」、「五間堀」、「埋立地1」の詳細が明らかとなり、淀城下を描いた絵図とほぼ一致していることを確認することができました。例えば、絵図では「外高嶋」に道路が描かれており、今回確認した路面がこれに該当する可能性が高いと考えています。

一方、「五間堀」はこれまでの復元図（図1）よりも北側に位置していたことが判明しました。これに伴って、「外高嶋」や「埋立地1」の位置も若干修正されて、図2のように復元することができます。

また、今回初めて確認した「五間堀」は想定外の様相を呈していました。これまで淀城跡で確認されている堀跡は天守台のような石垣によって保護されていました。しかし、今回確認した「五間堀」は緩やかな法面に石が張り付けられています。緩やかな法面に張り石で保護する工法は、桂川沿いで発見された近世護岸と近似しています。「五間堀」にこのような工法が用いられたのは、当該地が桂川との合流地点に近接した場所であることから城としての外観よりも治水機能を優先したと推測できます。

以上のように、今回の発掘調査によって城下町の詳細な復元や、絵図だけでは分からなかった「五間堀」の実態が明らかになりました。これらは桂川との関係を考える上でも、重要な成果だと考えています。

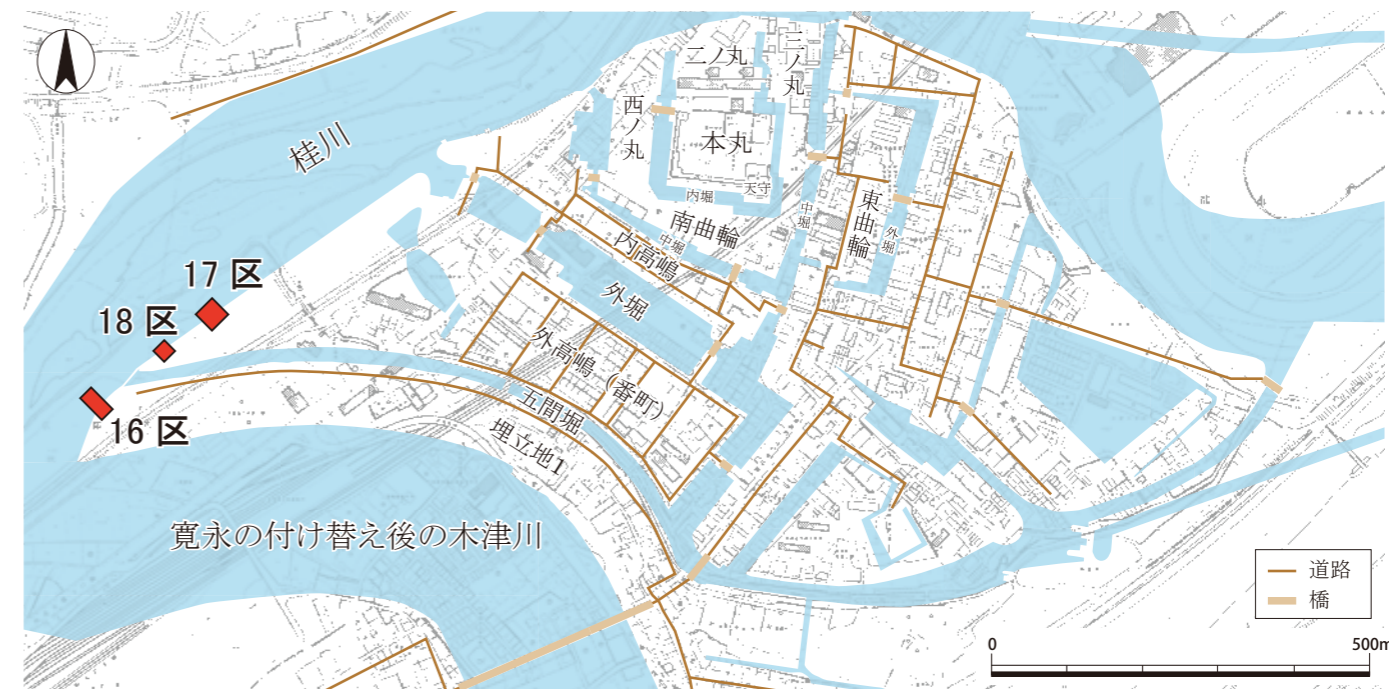


図1 調査位置と調査前淀城復元図との重ね合わせ図（1:10,000）

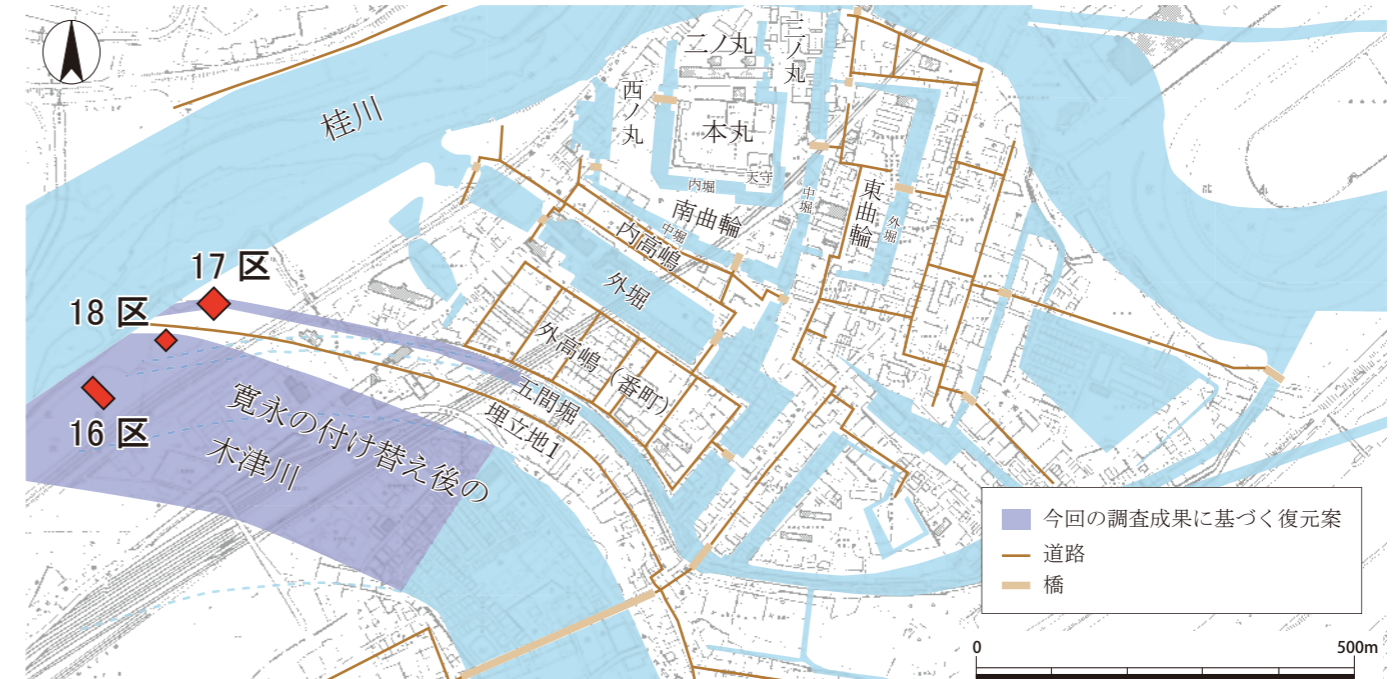


図2 今回の調査成果に基づいた復元修正案図（1:10,000）